

事業化の見通し

砂浜漁場開発の構想

砂浜における藻類の漁獲は皆無に近い。それは着生できる基盤がないためである。海藻の栄養源は無機栄養塩であるから、その十分な供給さえあれば、適当な施設を構ずることによって着生させ、砂浜において海藻を収穫することも困難ではない。事実、本県では砂浜の20m以浅でワカメの養殖は企業化の段階にあるし、ノリ養殖も冬期の風浪に耐える施設の開発をまわって企業化できる見通しである。前項で述べたように、当面、我々は砂浜漁業開発の増殖対象種として、藻類とともに貝類をえらぶことにした。一方、漁業の現況をみると、漁獲対象種中、魚類の占める比率は極めて高く、資源の増殖対策は望めないとしても、砂浜漁場の開発策として、魚類に対しても漁獲量を高める対策を考えなくてはならない。

その一法として、人工魚礁の設置による漁場改良が効果的であると考えられる。

貝類の増殖

過去の実績からみて、砂浜浅海での増殖対象種として、コタマガイが最適であることは疑いないが、市場価格が安いと、資源は増殖できてもどれだけ利用できるかは疑問である。チョウセンハマグリはこれまでに移殖の効果はみられなかったものの、聞取調査によると、以前に鳥取砂丘地先で多量に発生したといわれており、またハマグリは現在でも浦富地先でまれに採取されている。したがって、これら高価な種属は増殖対象として再検討の余地はある。

A・B桁網による採集結果として現在、砂浜域にはバイ、イタヤガイおよびナガニシの有用種が生息していることがわかったが、市場価格からみて、とくにバイとイタヤガイは増殖対象にとりあげてよい。バイは水深5mから40mの範囲で採集されており、港の中では漁獲物のこぼれを摂餌して、周年、生息していることなどをみると、一般的表現をすれば適応性の強い種であることがわかる。また、本試験の一環として行なったバイの採苗結果では、約7000個の稚バイを比較的容易に作る事ができた。したがって、本種は養殖も可能であろうと思われる。当面、稚バイの歩止りを向上させたい。

イタヤガイの生態については不明な点もあるが、そのりん画はかなり解明されてきた。ハマグリやコタマガイと違ってやや深い場所に生息しており、40～75m層の粗砂～礫地帯に多い。この水深帯での増殖対象として将来とりあげてよいものと考えられる。

魚礁の設置

本県の漁業形態をみると、漁船漁業が大半を占めている。したがって砂浜漁場の開発策としては、藻類などの新しい養殖業の開発と、未利用浅海部で貝類を増殖するいっぽう、漁船漁業に対しては、漁獲効率の悪い砂浜において、これを高めるための漁場改良を続けねばならない。岩礁域のせまい本県では古くから人工魚礁が設置され、かなりよく利用されてきた。魚礁の効果については諸説があるが、本県

の場合、主要な漁獲物であるブリについてみると、魚付きは漁期中たえずみられるものの、同一魚群が停滞する期間は比較的短いところから、培養的效果よりも集魚効果の方が強いものとする。

本県の場合、砂浜の海底では少量の魚礁によっても際立った地形の変化を生じており、この変化が強いほど魚付きの効果も強まるので、魚礁の利用度が高いのではないかと考える。

同型の魚礁を同量投入しても、周囲の海底の状況により効果は異なるのではないかと考える。

このように砂浜域における漁船漁業のための漁場改良としては、今後も魚礁の造成にまつところが大いである。

通常行なわれている並型および大型魚礁は高価であり、かつ、設置作業は専門者にまたねばならぬ欠点があり、漁協組が単独で行なうには負担に耐えない。これらの欠点をおぎなうて、かつ、ブロック魚礁と変りない成果を期待して、昭和44年度には人工海藻、タイヤ魚礁およびポリネット魚礁の設置を試み、現在、試験は継続中であるが結果については別途に報告の予定である。